

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

○ 幼児たちの「学びの芽」の育ち

本園での保育実践はまだ始まったばかりであるが、3つの「学びの芽」の育ちが少しずつ幼児に見られている。

(1) 「きょうどう」の芽の育ち

- ・ エピソード「2回結んだらいいよ。」「そっち持ってて！」や実践事例①では、友達とイメージを共有して遊ぶ（遊ぼうとする）姿が見られる。友達と遊ぶ中でも、一緒に遊んで楽しい→思いや考えを受け入れて遊ぶ（受け入れられて楽しい）、思い付きや発見を真似したり取り入れたりして楽しい→イメージを共有して、共通の目的に向かって協力して楽しい、と協同性が育ってきている。
- ・ エピソード「プリキュアに変身」や実践事例①・③で、他クラスにお客さんを呼びに行く姿が見られるが、このように自分のクラスだけでなく、たくさんの人と遊びたい、かかわりたいという気持ちの芽生えが、他者と協同し合うことにつながっていくだろう。

(2) 「かがく」の芽の育ち

- ・ ほとんどのエピソードに見られるように、「②-1 不思議・疑問」、「②-4 気付き・驚き」は自然事象やそれを取り入れての遊びの中で多く育っている。それらは、幼児自身が自ら体験しているものもあるが、教師が意図的に環境構成したり（エピソード「根っこって、何であるの?」、「お～い、早く起きてこ～い。」）遊びに取り入れたり（エピソード「だって木の葉っぱが揺れようもん!」、「こんな色水ができたよ～」）することによって、多様な体験を多くの幼児たちに経験させることができる。
- ・ エピソード「イルカのトレーナーになる!」では、遠足に行ったときの経験が、幼児の育ち（「②-2 憧れ」）に結び付いている。遊びや生活だけでなく、様々な体験が「学びの芽」の育ちにつながっている。
- ・ 実践事例②では、教師の環境構成が刺激となり、「かがく」の芽が育っている。この「学びの芽」は、対象や現象を実際に見たり扱ったりすることで多様に育っているようだ。

(3) 「ことば」の芽の育ち

- ・ エピソード「K君、はりきつとうね!」や実践事例③に見られるように、自分や自分の思いが友達に受け入れられたことで「ことば」の芽の最初の育ちがある。教師自身がその役割（受け入れ）を担ったり、クラス全体でそのような雰囲気をつくりだしたりしていくことが重要である。
- ・ エピソード「これは私が使っていたのに・・・」、「ねえ、お客さんなって?」や実践事例③「電王ショーを始める。」で見られる自分の意見をぶつけ合う段階から、エピソード「先生がしとつたらいいじゃない?」や実践事例③「友達と話し合って、プログラムを作る。」で見られる話し合いの中で、相手の意見を聞きながら自分の意見を主張する段階へと育ちが見られる。意見をぶつけ合うだけでは話が進まない、ということを実感し、相手の意見を聞きながら、そこに自分の意見を重ねている。そうしていく中で、問題を解決したり新しいアイデアを思い付いたりしている。

○ 3つの「学びの芽」を教育活動の視点に取り入れた効果

幼稚園教育の中で小学校教育へつながる力として3つの「学びの芽」を挙げ、教育活動を整理・展開させてきた。3つの視点はそもそも、「きょうどう（視点①）」＝「道徳」、「かがく（視点②）」＝「各教科」、「ことば（視点③）」＝「特別活動」のように捉えていたが、エピソードや事例にも見られるように、そこまではっきりとした区別はなく、むしろ相互に関連し合って育っていく力であり、幼児期の教育は相互に関連し合う領域をもとに行われているということがあらためて分かった。（同様に、視点②における5つの「基盤となる力」も独立性や順序性はなく、相互に関連し合っている）。特に年長児では、その活動のほとんどにこれらの「学びの芽」が含まれ、「協同的な学び」を通して育った力がそのまま小学校教育へつながっていくことが理解できた。

○ 指導計画の照合から見えてきたこと

本園指導計画を媒体に、2回にわたり幼稚園教育要領・小学校学習指導要領との照合を行った。その内容や結果は「I-4 研究の内容」に記しているが、次のようなことが小学校の教育につながると理解できた。

・領域と教科のつながり

次の表は、本園指導計画の幼稚園教育要領・小学校学習指導要領との照合より、全ての「ねらい」・「内容」について、幼稚園教育要領のどの領域を根拠としているのか、小学校学習指導要領の各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間及び特別活動（以下「各教科等」という）のどこにつながっているのかを示したものである。

例えば、I期の（ねらい1）「園生活の様子が分かり、身の回りの始末を自分でしようとする。」は、「健康」・「人間関係」のねらいを根拠として、「道徳」・「特別活動」につながっているのではないかと捉えている（別添えの資料を参照）。この場合、表の「健康」－「道徳」欄、「健康」－「特別活動」欄、「人間関係」－「道徳」欄、「人間関係」－「特別活動」欄にそれぞれ1カウントする。そのようにして作成した表である。ただし、複数の領域や各教科等にまたがっている場合は、一つとしてカウントした（「環境①」・「環境③」を根拠としていても、「環境」として1カウントし、2カウントはしない）。

（）内の数字は、その領域を根拠とする「ねらい」・「内容」の総数

	国語	算数	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国	特活
健康 (25)	1		9	1		1	10	9		11
人間 (52)	9		15	1	2		8	29		20
環境 (34)	2	1	30		3		1	9	1	1
言葉 (10)	7		1					3		4
表現 (15)	3		7	3	9		2			

※「社会」・「理科」・「総合的な学習の時間」はカウントされなかったため割愛した。

カウントの合計が（）ないの総数と一致しないのは、一つの「ねらい」や「内容」が複数の領域を根拠にしており、そしてまた複数の各教科等につながっていくとカウントされているからである。

この表によれば、特に「環境」領域のほとんどが「生活」に、「言葉」領域のほとんどが「国語」に結び付いていることが分かるだろう。また、「国語」、「生活」、「体育」、「道徳」、「特別活動」については、そのほとんどが5領域と関連がある。本園においては、指導計画の「ねらい」・「内容」に占める「人間関係」の割合が多いので（cf. 「I-4 研究の内容」）、「道徳」、「特別活動」につながっていくような「学びの芽」が特に育っている（或いは育てようとしている）、と推察することもできる。

照合した内容を以上のような表にまとめたことは、本園の教育活動が5領域の観点からどのような特徴をもち、また、それらが各教科等とどのように関連していくのかを把握するのに非常に役立った。

2 課題

以上のような成果を上げてきた本園の研究であるが、まだ経過途中であり、課題は山積している。

- 指導計画の上では小学校学習指導要領との照合を行ったが、実際に幼児たちが進学する各小学校の行事や活動でのつながり、各教科等とのつながりなど、より具体的に調べていく必要がある。
- 3つの「学びの芽」を視点に指導計画を見直し、それを日々の教育活動に少しずつ反映させてきているところであるが、「学びの芽」の育ちが読み取れる幼児の姿があるものの、どのような環境構成や教師の援助が効果的だったのかは整理されていない。視点ごとのある程度共通性のある環境構成や教師の援助が明らかになるように、今後も実践を続け、それをまとめていく必要がある。
- 本園で培われた「学びの芽」が今後どのように小学校教育につながり、育っていくのか、追跡調査を行っていく必要があるだろう。もちろんその時には、幼稚園・小学校の職員同士の連携も重要になってくる。
- 職員同士の連携だけでなく、園児と児童との交流も「滑らかな接続」をしていくためには必要と考える。各小学校との教育課程・指導計画との照合を踏まえて、行事や授業、休み時間等に、計画的な交流を行い、反省・評価をもとにあり方を検討しながら継続的に行っていくことが必要だろう。
- 指導計画と幼稚園教育要領との照合を行っていく中で、本園指導計画に反映されていない教育要領の「ねらい」が存在することが分かった（環境③・言葉③など）。このことは直接小学校教育とのつながりには関係しないかもしれないが、日々の教育活動ではそれらの「ねらい」に基づく保育が行われているわけで、今後の指導計画の見直しで反映されるべき事柄と言える。それに伴い、幼稚園教育要領・小学校学習指導要領との照合も継続して行っていくべきである。